総説 (REVIEW)

仏典の中の樹木
—その性質と意義— (1)

満久崇麿*

Trees in the Su'tra (1)

Takamarn MAKU*

1 緒言

熱帯樹木の性質を調べていると，その中に宗教とくに仏教に関連した植物の名がしばしば出てくることに気がつく。このことは仏教が前6世紀にインドに興り，東方に発展し，1世紀にはシルクロードから中国に伝えられ，さらに朝鮮半島をへて，すでに6世紀の中頃日本に伝来し，わが国の文化，美術に大きく貢献したことを考えれば当然のことで，今更気がつくのはむしろうかつな話であるかもしれない。これらの植物は本来，仏教々義の説明や宗教活動のために利用されたものであるが，このうちのかなりの数の樹木が，建築材料，家具材料あるいは美術工芸材料として，また香料植物，薬用植物，花卉植物として，すでに古くからわれわれ日本人の生活の中にとけこんでいる。それにもかかわらず，仏教樹木として案外われわれに理解されていないのは，それなりの理由があったかもしれぬが，1つには日本では仏典自体が理解することよりもむしろ儀式用として利用されていたことに原因しているといえよう。

植物と人類の公的な関係は，歴史学的には最古の原始人と考えられるアウストラロピテクスが地球上に出現した時代にはじまる訳であろうが，地球上の植物がゆたかになり，人類の智慧が進んだホモサピエンスの時代からその近密度が急速にましたものと推定される。その後，前3000年頃から歴史上にあらわれたセム族の間にはすでに聖木崇拝の習慣があり，樹木はよく比喩に使われ，大木は力，長寿のシンボルであり，果実の豊作は神の恩恵，不作は神の怒りであった。

したがって仏典にもまたこのような思想が流れており，そこに登場する樹木を通して古い時代の人間生活に対する樹木のかかわり方，いわば樹木文化史の一端をうかがい知ることができ，木材学にたずさわる者にとっても興味深いものがある。この事がサンスクリット語もパーリー語も，また仏教学も，わずかに垣間みたにすぎない筆者をして，おこがましくもこの仕事にかりたてた1つの理由でもあろう。

さて，これらの樹木の検索と解説には，国訳一切経，Pali-English Dictionary, Sanskrit-English Dictionary を3つの主軸にして，末尾の各書を参考にさせていただいたが，仏典関係の参考書には仏教専門語が用いられていて，一般に理解しにくいものもあるので，できるだけその意味を失なわない程度で解りやすいものになおしたものもある。失礼をお詫びすると共に，これらの著者，訳者の方々に深い敬意と感謝を捧げたい。

樹木はサンスクリット語，パーリー語原語のはっきり判っているもの，漢訳語でも確実に学名の把握できるものだけを抽出して正確を期した。しかし，上記の原語と樹木学名との間にはまだ不明な点の多いものもあり，筆者の浅学のために思わぬ誤りを犯しているものがあるかもしれない。これらについてはそれぞれ専門の方々の御叱正をいただき訂正してゆきたいと念願している。

本文は国訳一切経という尨大な仏典のうち，主として法華部，華厳部および阿含部と世界古典文学全集の仏典Ⅰ，Ⅱによって調査したものの，さらにその一部で，まさに氷山の一角にすぎない。また調査の目的は

* 木質材料学研究部門 (Division of Composite Wood)

広く仏教樹木の木材利用におけるポジションをはっきりさせることであり，木材の組織や材質について専門的に深く立ちいることを避けた。今後もこの意味で時間の許すかぎり引続き調査を進めて逐次発表し，機会をみて再整理したいと思っている。

樹木の配列は植物分類表によらないで，仏典にたびたびあらわれるもの，仏教々義と樹木利用の2つの面から重要と思われるもの，あるいはそれに関連の深いものから順次配列しただけで，それ以外に特別の意味をもっている訳ではない。

各論の見出しの樹木名は原則として和名を用い，ついで学名，サンスクリット名（またはパーリー名），漢訳名または中国名の順としたが，サンスクリット名や漢訳名などを見出しに使った方が一般に判りやすかったり，纏めやすい場合にはこの順序をいれかえた。また樹木名には非常に多くの和名，漢訳名，中国名，インド名があり，中途半端な羅列はかえって混乱をまねくおそれがあるので，最も代表的なものだけにとどめ他は省略した。

写真は，国内では大部分京都府立植物園，東京大学小石川植物園，国立衛生試験所伊豆薬用植物栽培試験場，静岡県有用植物園，太地熱帯植物園および京都大学古曽部温室などで撮影したもので，その際多くの方々に御世話になった。また主要樹木の1つであるオーギヤシの写真は佐竹利彦氏の，またサーラーの写真はインド林業試験場長およびナラヤナムルチ博士の御好意によったものであり，パキスタン，インド，セイロンおよびシンガポールの各植物園でのものは当研究室の大学院学生滝野真二郎君をわずらわしたものである。これらの方々には深い感謝の意を表したい。

2 総　　論

仏教にはいろいろの樹木，花卉，香木，香花が，単なる教義上の比喩として，あるいは身を清め，精神を安定させ，悟りの場を作り，悟りえの境地をたすけ，悟りを祝福するものとして，あるいはまた人間の平等を説き，自然界の調和を尊ぶ比喩としてなど，いろいろの意味で引用されている。このうち，比較的単純な教義上の比喩として引用されている場合が最も多いようであるが，単純なだけにまたきわめて明快でもあり，樹木の特性をよくつかんだものが多い。

これらの内，通俗的に有名なものは

アショカ	*Saraca indica* L. (Aśoka)
インドボダイジュ	*Ficus religiosa* L. (Bodhi)
サーラ	*Shorea robsta* Gaertn. (Sāla)

の3樹種である。アショカは釈迦の生誕，結婚に，インドボダイジュはその成道（悟りをひらくこと）に，サーラはその入滅（死）に関連があり，これを仏教3霊樹と呼んでいる。インドボダイジュはイチヂク属で，日本で普通ボダイジュと呼んでいるシナノキ属のものとは種類が違う。最後のサーラはインドの3大有用樹種の1つでもある。これに

タマリンド	*Tamarindus indica* L. (Āmla, Ciñcā)
エンジュ	*Sophora japonica* L.

を加えて仏教5木ともいう。タマリンドは釈迦や仏弟子たちがよくこの木の緑蔭の下で冥想し，説教をしたといわれ，ギリシャ哲学のプラタナス *Platanus orientalis* L. とともに学林樹木であるとされているが，筆者の調査した範囲では仏典にはでてこない。簡単に断定はできないが，タマリンドは梵語で Āmla とよびマンゴーの Āmra と似ていることからマンゴーと混同されたのではないかと思われる。それはともかく，タマリンドはインドからマライにかけて広く栽培されているが，果実は食料として非常に用途が広く，古い時代にはインドの主要食料の1つであった。材もまた諸器具用として有用な樹木である。エンジュは中国原産で，中国では神聖樹でもある。仏教とともに日本に伝来したといわれているが，おそらく中国，日本あたりで5木に加えられたものであろう。これも種子，材ともに有用な樹木である。

さて上述したように学林樹木としては筆者はタマリンドよりもむしろ

マンゴー　*Mangifera indica* L. (Āmra)

をあげたい。仏典によれば釈迦はたびたび多くの弟子たちと共に各地のマンゴー林に滞在し，その緑蔭の下で思索し，説教しているが，その生活は丁度日本の林間学校のようなものであったろうと想像される。彼等はまた，マンゴーの林内で，おそらくは南国の名果といわれるその果実をも十分楽しんだことであろう。サーラも平家物語などで釈迦入滅の木としてあまりにも有名になりすぎているが，本来はむしろ学林樹木として重要な役割を果している。

仏教樹木には今1つ有名なグループとして five celestial trees (flowers) がある。それは一般には

	デイコ	*Erythrina indica* L.	(Mandārava)
	大デイコ	〃	(Mahāmandārava)
	マンジュシャカ	?	(Mañjushaka)
	大マンジュシャカ	〃	(Mahāmañjushaka)
と	蓮華	*Nymphaea* spp.	(Padma)
または	フイリソシンカ	*Bauhinia variegata* L.	(Kovidāra)

の5種であるが，はじめの4種がレギュラーで，よく天からふりそそぐいわゆる「天華」として扱われる。大デイコ，大マンジュシャカは単にデイコ，マンジュシャカの偉大さ，美しさを強張しただけであるが，いずれも仏陀や菩薩の冥想や悟りの喜びを祝い，会い難いことにあう喜びの慶祝華である。これらの天華や，極楽世界をはじめとする多くの仏国土を象徴するターラ，タマーラなど，神話的な世界の植物に実存の植物をあてている所に，脱しきれぬ人間性があらわれていて，面白くもあれば，またかなしくもある。しかし，こういう話はどの神話も共通的なものをもっている。旧約聖書，創世紀にでるノアの箱舟の材料は昔は *Cupressus* だろうといわれていたが，この頃は *Fraxinus* 説が有力だそうだし，トロイアの木馬は *Abies* で作られたそうである。

3霊樹や5木という名は後年インド以外の国，おそらく日本あたりでつけたものではないかと思われるが，仏典には釈迦が祇園精舎で比丘たちに述べた説教の中に「五樹の教え」というのがあり，5樹木が次のような意味に引用されている。

「ニグローダ，ウドンバーラ，プラクシャ，カッチャパ，カピッターの種子は小さいが放任しておくと大木となり，他のいろいろの小木を被圧して，その生長を邪げる。これと同様に心が正しくないと五蓋（貪欲，いかり，身心沈滞，精神不安定，疑）がほしいままに広がり善心を覆って障害となる」（法華経—樹経）

ニグローダ (Nyagródhā)	*Ficus indica* L.
ウドンバーラ (Udumbála)	*Ficus glomerata* Roxb.
プラクシャ (Plaksha)	*Ficus infectoria* Roxb.
カッチャパ (Kacchapa)	*Cedrela Toona* Roxb.
カピッター (Kapitthaka)	*Feronia elephantum* Correa.

これらの樹木の特長については後章で説明するが，このうちとくにニグローダとカッチャパは巨大樹となる。

前述したように，ある種の樹木はセム族時代にすでに長寿や力の象徴であり，神聖なものであったが，仏典の中でもある種の樹木は，単なる教義上の比喩から次第に神秘的な色彩をおび，偉大なる悟り，偉大なる悟りを得た者となり，あるいは金，銀，琥珀など7種の宝石，いわゆる七宝で作られた宝樹となって，如来たちの悟りを祝福し，仏国土を飾る。インドボダイジュ，ニグローダ，マンダーラヴァ，ターラなどがそうである。

さて，樹木を教義上の比喩に用いた例をあげると，たとえばジャータカ（Jātaka：平川彰訳　本生経，仏

典Ⅰ）では

「この世に仏陀という大樹があるならば，よく一切の天人（霊的存在），世人（人間），阿修羅（魔神）たちの煩悩という毒蛇を除くであろう。もろもろの衆生（いきもの）が仏陀という大樹の涼しい木蔭に住むならば，煩悩という毒は消失するであろう。……アームラ（マンゴー）の木の花は多いが実を結ぶものが少ないように，菩提心（悟りをえようとする心）を起すものは多いがこれを成就するものは少ない」

マンゴーはこの文章の通り花は沢山咲くが結実は少ない。というよりむしろ花（不完全花）が多すぎるという表現の方が適切であろう。

また，維摩経（Vimalakīrti-nirdeśa：中村元訳　維摩経，仏典Ⅱ）では

「汚れのないことがらはその林の樹木である。悟りの心は浄らかな妙なる華であり，解脱（悟りをひらくこと）したと知る智慧はその果実である」と述べ

華厳経―離世間品第387で普賢菩薩は次のような頌を作っている。

「菩薩は蓮華の如く，慈を根とし，安穏を茎とし，智慧を蕊とし，……また菩薩は妙法（仏法）の樹にして直心（菩提を願う真実の心）の地に生じ，信（心を清浄にする精神作用）を種とし，慈悲を根とし，智慧をもって身となす。方便（すぐれた説得，指導方法）を枝幹となし，定（安定不動の心）を葉とし，神通（神通力）を華とし，一切の智（物事の実体を知り迷を断ち決断しうる力）を果となす」

また雑阿含経―種樹経，大樹経では

「人が木をうえる時，はじめは小さいが，これに肥料を与え，水を与えて撫育すれば，ついには大樹となる。これと同様に貪欲，いかり，ぬすみその他の煩悩や執着に心をしばられると，愛欲や愛欲を求める心，生，老，病，死，憂悲，悩苦など順次生じて，ついには四苦，八苦などいろいろの苦が集まり大苦（108苦）となる」

という意味のことが述べられ，中阿含経―戒経には

「仏教における戒は木の根の如きものである。木はその根を断つと葉，茎，華，果皆うることができない。同様に比丘が守るべき戒を犯すと悟りをうることはできない」

仏教はまた，人間の平等，自然界のありのままの姿―調和―を尊び，この思想を樹木や動物を介して，教義の中にしばしば強調している。

釈迦在世当時のインドにはバラモン教の影響でカスト（インド特有の強い階級制度）がしかれ，バラモンが最も尊く，次で王族，庶民の順で，隷民（征服された先住民）が最も下層階級とされていたが，仏典ははっきりこれを否定している。

「サーラの薪から生じた火は焼く力があるが，他の木の薪から生じた火は焼くはたらきがないというような区別はない。……これと同様に人には生れの貴賤による差別はない」（Sutta-nipāta：中村元訳，ブッダの言葉，岩波文庫）

ヴァジラスッチ（Vajrasūci：中村元訳　金剛の針，仏典Ⅱ）では，さらに多くの樹木が人間の平等のために登場してくる。

「ヴァタ，ヴァクラ，パラーシャ，アショカ，タマーラ，ナーガケシャラ，シリーシャ，チャンパカなどもろもろの木には葉について，花について，果実，種子，樹皮，樹幹あるいは芳香などについて区別がある。しかし，バラモン，王族，庶民，隷民には身体，四肢，皮膚，肉，血，骨などについて区別はない。また，快，不快，生，死，セックスなどに関してもすべて平等である。……また，ウドンバーラやパナサの果実のように，同一の樹木から生じたもろもろの果実は，皆同じであり，枝から生じた果実，小さな幹から生じた果実，大きな樹幹から生じた果実などという区別はない。これと同じように，もろもろの人間にも区別は存在しない。いずれも同一の原人から生じたものである……」

これらの樹木の特長を引用の範囲で簡単に説明すると

ヴァタ (Vata)	*Ficus indica* L. は大樹となり
ヴァクラ (Vakula)	*Mimpops Elengi* L. は花に新酒のような芳香があり，香水をとり，果実，種子は食用となる。
パラーシャ (Palāśa)	*Butea frondosa* Roxb.
アショカ (Aśoka)	*Saraca indica* L. はともに花がきれいであり
タマーラ (Tamāla)	*Cinnamomum Tamala* Nees? は葉，樹皮が香料となる。
ナーガケシャラ (Nāgakesara)	*Mesua ferrea* L. は花に芳香があり，材は有用
シリーシャ (Sirīsa)	*Albizzia Lebbek* Benth. は花に芳香，樹膠から香料をとり
チャンパカ (Campaka)	*Michelia Champaka* L. は花から香水をとり
ウドンバーラ (Udumbála)	*Ficus glomerata* Roxb.
パナサ (Panasa)	*Artocarpus integrifolius* Auth. はともに果実が幹生である。

勝鬘経で，スリーマーラ夫人は

「大地は4つの大いなる重荷の支えとなります。すなわち大地は大水の集まった大海と，すべての山や土地を支え，すべての植物——草木，薬草，花，森——の生育場所，そしてすべてのいきものの生活基盤であります」(Srīmālā-sutra：高橋直道訳　勝鬘経，仏典Ⅱ)

といい，また法華経—薬草喩品で釈迦は弟子のマハーカッシャパに

「全世界の山川谿谷に生ずる雑草，潅木，薬草，樹木などの上に密雲が覆い雨ふらすとき，これらの植物はその大小に応じてひとしくうるをされ，それぞれその本分に従って生長し，花を咲かせ果実をみのらせる。如来の出現も丁度この大雲の起るようなものである。衆生（いきもの）の能力，精根，体力に応じて教えを説き悟りをえさせるものである……」

と教え，人類のみでなく自然界はすべて，ありのままの姿で調和さるべきことを説いている。

仏典にはまた，各種の香木，香花，香油などがいたる所に出現する。インドのような熱帯では，日本で想像する以上に多くの香料がいろいろの目的で利用されているが，仏教では香木や香料は人間の貪欲，いかり，無知，その他あらゆる煩悩を払い，心身を清浄と愛情で満たし，悟りえの道をたすけるものであり，また悟りの喜びを祝い，仏を供養するものであり，さらには仏国土の象徴でもある。

釈迦は阿含経で

「王や大臣が諸香を使うごとく，比丘や比丘尼は戒をもって塗香となし，善を修得する」（中阿含経—三十喩経第5），

「たとえば百草薬木が皆地によって生長しうるように，いろいろの善法は皆不法逸（もっぱら精進すること）によることを本とする。すなわち，不放逸が一切の善法の中で最上である。これは丁度，黒い沈水香が諸香の中で最上であり，赤栴檀が堅い香の中で最上であり，優盆羅華が水陸の諸華の中で最上，末利華が陸華の中で最上，閻浮果がすべての果実の中で最上であるごとくである」（雑阿含経—不放逸根本経，中阿含経—喩経第25）

という意味の説話をしている。

大無量寿経，阿弥陀経，法華経，華厳経などに引用されている香花，香木は神話的なものが多いが，樹木学の立場から，できるだけ沢山の樹木，香木がパレードする数節を抜萃して紹介しよう。

釈迦が王舎城の耆闍崛山中や舎衛城の祇園精舎で愛弟子のアーナンダやシャーリプトラなどにのべた極楽世界の話の中に

「極楽世界には阿弥陀如来の菩提樹がある。その高さ1600ヨージャナ（Yojana，由旬：長さの単位で約 4 km，12 km，あるいは 14.4 km ともいわれる），大枝が垂れること 800 ヨージャナ，根の高さと太さ 500 ヨージャナ，常に葉，花，果実あり，……また，そこには大河があり，タマーラの葉，アガル，カーラア

ヌサーリン，タガラ，ウラガサーラチャンダナなどの最上の香を含む水が流れ，青蓮華，紅蓮華，黄蓮華，白蓮華に覆われている。……またそこには七重のターラの行樹（並木）があり，七宝からなる池がある。池中には車輪ほどの大きさの蓮華があり，青色，黄色，赤色，白色を発し，……昼夜6回，曼陀羅華が雨とふる」

沈　水（沈香）(Agaru)	*Aquilaria Agallocha* Roxb. からうる香木
赤　栴　檀 (Candana)	*Santalum album* L. よりうる香木（栴檀）の一種
優　盔　羅　華 (Utpala)	*Nymphaea Stellata* Willd. 青蓮華
末　利　華 (Mallaka)	*Jasminum Sambac* Ait. の花（香水の原料）
閻　浮　果 (Jambu)	*Eugenia Jambolana* Lam. の果実
タ　マ　ー　ラ	前　出
ア　ガ　ル	前　出　沈水
カーラアヌサーリン (Kālânusārin)	*Styrax Benzoin* Dryand. よりうる香料
タ　ガ　ラ (Tagara)	*Tabernaemontana coronaria* Willd. 花に芳香
ウラガサーラチャンダナ (Uragasāra candana)	栴檀の一種
青　蓮　華 (Utpala)	前　出
紅　蓮　華 (Padma)	*Nelumbo nucifera* Gaertn.
黄　蓮　華 (Kumuda)	*Nymphaea mexicana* Zuc.?
白　蓮　華 (Puṇḍarīka)	*Nymphaea lotus* L.
タ　ー　ラ (Tala)	*Borassus flabellifer* L. 荘厳樹
曼　陀　羅　華 (Mandārava)	前　出

しかし，これらの話の中で最もわれわれの魂をゆさぶるのは，一切衆生喜見菩薩の焼身の物語りであろう。すなわち

「悟りをひらいた喜見菩薩は恩師日月浄明徳如来に対する供養は自己の肉体を捨てるにしかずと考え，栴檀，薫陸，兜楼婆，畢力迦，沈水などの樹脂を食べ，瞻蔔などの花の香油を飲むこと1200年，身に香油をそそぎ自らの身を燃やす。この火は1200年（あるいは12000年）間燃え続け，喜見菩薩は再び生れ変る。これが後の薬王菩薩である」（法華経―薬王菩薩本事品）

薫陸香樹 (Kunduru(ka))	*Boswellia thrifera*? 樹皮から柔かい，芳香をもつ樹脂を分泌する。これを乳香 olibanum という
兜　楼　婆 (Turuṣka)	olibanum のこと
畢　力　迦 (Śephālika)	*Nyctanthes Arbor-tristis* L. 花に芳香あり
沈　水 (Agaru)	前　出
瞻　蔔 (Campaka)	前　出

焼身は如来への最高の供養であるが，同時にまた至高の悟りをうるための悲願でもあり，その精神は現代のヴェトナムにおける比丘たちの世界平和への崇高なる焼身の非願にも通じている。ミイラもまた，たとえ生命がなくなっても肉体はそのまま残って，釈迦入滅後56億7000万年をへて，弥勒菩薩のこの世えの出現をまって再生を願うものであり，これはまた，現代の冷凍人間ベッドフォード博士の願にも通じているといえよう。いずれも人間の悲願の究極の姿であろう。

法華経，阿弥陀経，大無量寿経に考えられている宇宙は，法華経的表現を借れば，ガンヂス河の砂の数ほどもあるいろいろの仏国土，いはば仏国土系からなりたち，その構想はあたかも近代科学によって組立てられた太陽系ないしは銀河系に相当し，釈迦を教主とするこの娑婆世界（Sahā-loka）の西方十万億土のかなたには阿弥陀如来を教主とする極楽世界（Sukhāvati）がある。このような宇宙観は100年あるいは200年

前には一般民衆にとっては単なる神話にすぎなかったが，スプートニック，アポロあるいはマリナや火星3号がとぶ現代では，浄土であるかどうかは別として逆にいちぢるしく現実性をおびてきている。この雄大な構想は現代はともかく，科学知識の低かった当時では一流の知識人や予言者たちが一堂に集まってゼミナールを開いても，とうてい生れるものでない。おそらく唯1人の超霊感の持主によって発想されたものであろう。とすればやはり釈迦自身の教えの中にすでにこの思想が含まれていたと考えるのが妥当であろう。

歴史的事実として，至高の悟りをひらき仏陀（如来）となったのは釈迦ひとりであるが，後年になって釈迦以前に6人の仏陀がこの世に出現したという考え方が生れた。これを過去六仏といひ，あるいは釈迦を加えて過去七仏ともいっている。これらの仏陀にはいずれも釈迦のインドボダイジュに相当する菩提樹（菩提すなわち悟りをえた時の樹）があるので最後にこれを紹介しておく。

累婆尸仏 (Vipassī)：　Pātali, *Stereosperumum suaveolens* DC.?
尸棄仏 (Sikhin)：　Puṇḍarīka, *Nymphaea lotus* L.
累舎婆仏 (Vessabhū)：　Sāla, *Shorea robsta* Gaertn.
拘楼孫仏 (Kakusandha)：　Sirīsa, *Albizzia Lebbek* Benth.
拘那舎仏 (Konāgamana)：　Udumbála, *Ficus glomerata* Roxb.
加葉仏 (Kassapa)：　Nyagródha, *Ficus bengalensis* L.

3 各　　論

1) サラー *Shorea robsta* Gaertn. Sāla, 沙羅（双）樹

「祇園精舎の鏡の声，諸行無常の響あり，沙羅双樹の花の色，盛者必衰の理を顕す」で有名な沙羅双樹がこれである。釈迦がヒラニヤヴァテイ河畔で入滅（死）を予知し，弟子のアーナンダに命じて，東西南北に一対づつはえているサーラの木の間に，北を枕に床を用意させ涅槃（あらゆる煩悩を滅した完全最高の仏教的理想境）にはいり入滅した悲しみの木として，日本人の間ではその名はあまりにもよく知られているが，インドにおける重要樹種であることは意外に知られていない。おそらく木材学者の中でもこれがラワンの同属であることに気のついている人は少ないであろう。

サーラはインドにごく普通にある樹木でチーク *Tectona grandis* L. f.，ヒマラヤシダー *Cedrus deodara* Loud. とともに3大重要樹種として各地に植林されているが，ヒマラヤ山麓，中央インド東部およびベンガル州西部に多く，古くからよく純林をなし，釈迦や文珠菩薩らが遊行中しばしば，バッダサーラ林，ゴー

写真1　*Shorea robsta Gaertn.* 沙羅双樹の葉
(President, Forest Research Institute, Dehra Dun, および Dr. D. Narayanamurti の御好意による)

シンガサーラ林，ローイッチャサーラ林その他各地のサーラ林に滞在して宗教活動をしていたことが仏典に記載されている。(華厳経—入法界品第39，雑阿含経—疾漏尽経，因業経，採薪経，中阿含経—算数目犍連経第3，長寿王本起経第7，無刺経第13，牛角娑羅林経，長阿含経—露庶経など)

これはサーラの木が大きく，葉がよく繁茂し，その緑蔭は涼しく，その林は丁度林間学校のように団体生活に適していたためでもあるが，サーラ林の奥深く1人はなれて，樹下に結跏趺座し冥想するためにも利用されている。(中阿含経—長寿王本起経第1)

釈迦が当時のインドの階級制度を否定し，サーラの木を引用して人間の平等を説いた話はすでに紹介したが

「サーラ林をよく撫育すれば美林をうるごとく，戒を守ればよい結果をうるであろう」(中阿含経—算数目犍連経)

などサーラは仏典では，悲劇の木としてよりも，むしろ縁起のよい，有用樹として引用されている場合が多い。事実サーラという言葉自体は吉兆を意味し，魔除けの意味で古代から椅子やベットに使用され，チークやナガミパンの木とともに船の材料として用いた事が記述されている。日本の寺院でも霊樹として，古い昔

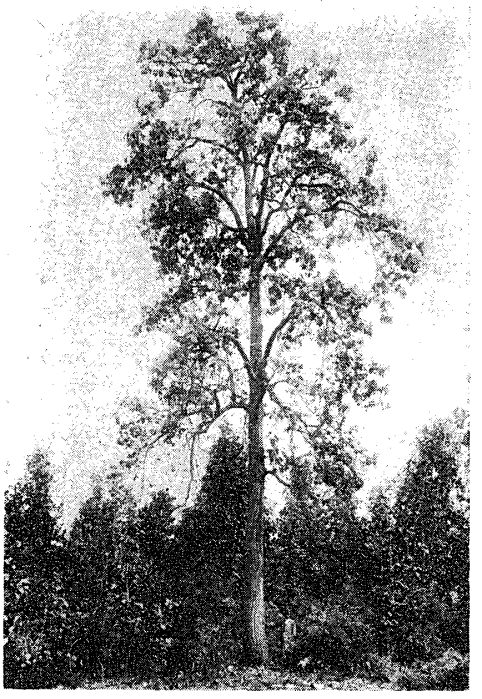

写真2 *Shorea robusta Gaertn.* 沙羅双樹 (同 前)

写真3 *Stewartia Pseudo-Camellia* Max. ナツツバキ (比叡山浄土院)

に植栽されたと伝えられるものもあるが，熱帯樹であるから露地では生育しない。比叡山浄土院廟前のサーラの木と伝えられるものは**ナツツバキ *Stewartia Pseudo-Camellia* Max.** であるとされている。

さてサーラは樹高40～50m，樹幹直径1～2.5m，枝下20mに達する落葉の大喬木であり，その種子は焼けば食用になる救荒植物で，1897年のインド大飢饉の折にこれが大いに役立ったといわれている。また子葉の油を sal butter とよび料理，燈火用に使われる。

インドでは一般に sal と呼び，前述したようにチーク，ヒマラヤシダーと並ぶ3大有用樹種の1つで，とくにネパール，ベンガル北部，アッサム地方のものが上質である。辺材は黄白色，心材は黄褐色から暗褐色を呈し，強度，耐久性，耐蟻性がよく，代表的な構造用材である。インドのパータリプトラ市にあるマウリヤ朝 (Maurya：前317年～前180年) の遺跡から sal の梁が発掘されており，その他の出土品からもこの

材がかなり用いられていたことが推定され，おそらく釈迦在世当時にも建築用材として相当利用されていたことが推察される。鉄道枕木として最適の樹種で第2次世界大戦末期には年間200万トンも伐採され，その中1/3が枕木に利用されていた（Chowdhury, Indian Woods)。その他柱，桁，建築一般，橋脚，橋桁，電柱あるいは船舶用（とくに丸木船），変った所ではピッケルアーム，テント棒など広く土木，建築用に使われている。またその樹皮はかつて重要なタンニン資源であったが，現在は燃料としての重要性がまだ無視できないし，最近はボード原料としての研究もはじめられている。樹皮を傷つけて採取した樹脂はカーラ(Kāla）とよび宗教儀式の薫香や蚊やりに用い，ボートのコーキング剤，塗料としても利用できる。ただし収量は少ない。

Shorea obtusa Wall. は Burma sal と呼び，サーラによく似た材でタイではテン（teng)，ビルマではシトヤ（thitya)，カンボヂヤではプチェック（phchek)，ラオスではチック（chick）とよび，ほぼサーラと同じ用途をもっている。

2）**インドボダイジュ** ***Ficus religiosa*** **L.** Bodhi(vrkṣa), Aśvatta, 菩提樹

現世の無常を感じ出家したゴータマシッタルタ（釈迦の王子時代の名）がさまざまな遍歴，苦行の末，最後にナイランジャナー河のほとりのアシュヴァツタの木の下で至高の菩提（悟り）をえて仏陀になったこと，それ以後この木を菩提樹とよぶようになったこと，あるいはその前後のさまざまの物語りは専門書に詳しく述べてあるが，そのうち樹木にも関係の深い物語りとして Oldenberg の The Vinaya-Pitaka によると，

「悟りをひらいた釈迦は1週間インドボダイジュの下で神々の祝福をうけ，法悦にひたり，第2週目には冥想から立上ってアジャパーラ（Ajapāla）の木の下に移り，ここで再び冥想にふけり，第3週にはムチャリンダ（Mucalinda）の木の下におもむき，さらに7日間冥想した後，ラージャーダナ（Rājâdana）の木の下に移って1週間結跏趺座し解脱（煩悩の束縛からの解放—悟り）の楽みをうけ，第5週目には再びアジャパーラの木の下におもむく」

写真4　*Ficus religiosa* L. インドボダイジュ　（小石川植物園）

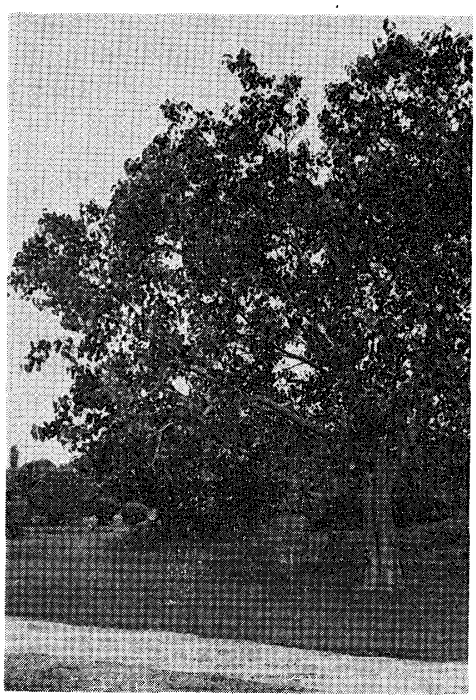

写真5　同　前
(Delhi, Buddha Jayanti Memorial Park.)

これらの樹木については後章で逐次説明するが *Ficus* (イチヂク属) にはいわゆるイチヂク *F. Carica* L. のような有用果樹，インドゴム *F. elastica* Roxb. などのような有用，観葉植物，インドボダイジュのような神聖樹などが含まれており，果樹のイチヂクは日本では庭に植えると病人は断えないが子孫が絶えるとか，病人のうなり声で木が育つなどといわれ忌樹として喜ばれないが，インドではインドボダイジュのほか，バンヤン樹 *F. benghalensis* L.，ウドンゲ *F. glomerata* Roxb. などは，神聖樹，智慧の木，あるいは緑蔭樹として大切にされている。

さてインドボダイジュは後世仏陀の偉大さを象徴するものとして次第に神秘化され，荘厳化され，巨大化されてゆく。たとえば釈迦が悟りをひらいた時，その地には七宝造りのインドボダイジュが出現し（華厳経—世主妙厳品第1，法華経—提婆達多品第12，化成喩品第7），阿弥陀如来の極楽世界には一本の巨大なインドボダイジュがあり（前述），常にさまざまな色，形の葉，花，果実をもち，これが微風に吹かれるとき，その妙音は無限の世界に達し，これを聞くものは耳の病を患うことなく，この木を見，その香を知り，その味をなめるものは病気にあわず心の乱れることはない（大無量寿経）。

このような神話的なものは別として，きわめてまれであるが，*Ficus* をいわゆる花のない木として現実的な扱いをしている例もある。前述の Sutta-nipāta の中に

「イチヂクの木の林の中に花を求めても得られないように，もろもろの存在のうち堅固なもの（本性）を見出しえない修行者は，この世とかの世をともに捨てる」

インドボダイジュは，後述するようによく中国原産のボダイジュと間違えられるが，**インドジュズノキ *Elaeocarpus Ganitrus* Roxb.** ともよく間違えられる。インドジュズノキの種子は菩提子（金剛子）といい直径約 1 cm，ほぼ球形で表面に凹凸があり，これをそのまま，または磨いて作った数珠は功徳無量（ムクロジ *Sapindus Mukurossi* Gaertn. の種子で作った数珠は功徳千倍，水晶は功徳百万倍）といわれている。ネックレスなどにも用いる。ネパール，アッサム，ベンガルからマライまで分布生育している。気乾比重 0.4～0.45の軽い木で箱類に使うこともあるがあまり利用されない。

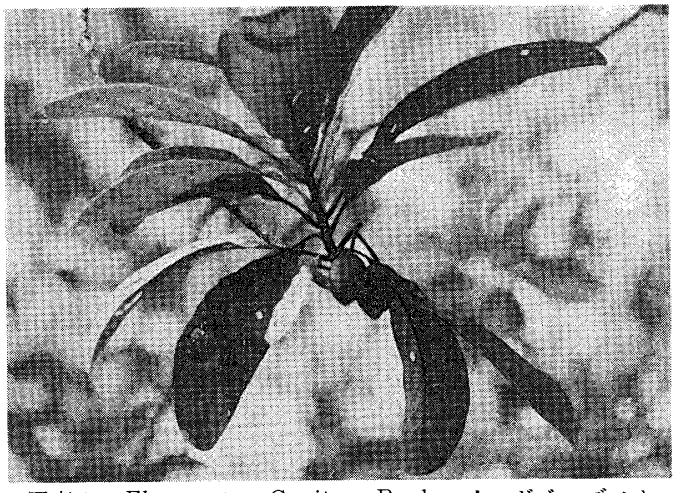

写真6　*Elaeocarpus Ganitrus* Roxb. インドジュズノキ
(Singapore, Botanic Gardens.)

インドボダイジュは常緑で高さ 6 ～20m，樹幹直径 1 ～ 2 mに達し，写真でみるように樹高の割に樹幹が太く，枝が四方にはって樹冠が広い。葉は卵形であるが先端がきれいに長くのびた独特の形をもち鮮麗な青緑色を呈しており，インドの代表的な緑蔭樹である。若葉は食用，飼料になり，樹皮からタンニンがとれる。またシェラック樹脂を分泌するラック虫がよく寄生する。インドでは材を pipol と呼び，灰色をして軽軟，気乾比重0.55位で箱物や農器具用材に適するが本来神聖樹としてあまり利用しない。木はこれを材と

して利用するばかりが能ではない。樹木として活かした方がはるかによい場合も多い。インドボダイジュ，ベンガルボダイジュ，アショカなどは，このような樹種であろう。

日本では温室でしか育たないが，葉の形と色調が非常にきれいなので，最近は式場の生花用に引張りだこだそうである。そのせいかどうかしらぬが，京都近辺の温室にあるインドボダイジュは，いつみても素っ裸にされており，丁度，やせおとろえて，あばら骨のうきでたガンダーラ（Gandhara）の苦行する釈迦像を連想させていたいたしい。

3) **ボダイジュ** ***Tilia Miqueliana*** **Max.** 菩提樹

インドボダイジュはよくこのシナノキ科，属のボダイジュと間違えられる。この木は中国原産の落葉樹で葉がインドボダイジュに一寸似ているため，中国で間違えられ，そのまま日本に伝えられたものであろうといわれている。永万3年（1168年），僧栄西が中国天台山の菩提樹の種子を持帰り，福岡県の香推神社にうえたとも，あるいは比叡山の西塔に植えたとも伝えられているのが最初である。その後，仏樹として多くの寺院に植えられ，いろいろの伝説もうまれている。

写真7　*Tilia Miqueliana* Max. ボダイジュ
（比叡山浄土院）

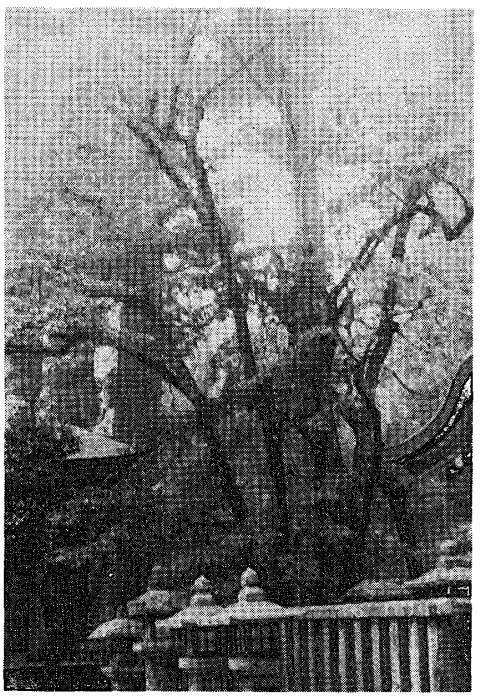

写真8　同　前

樹高は普通10～15m，樹幹直径約 60cm に達する喬木で，6月頃淡黄色の花がさき果実は小粒の球形で核は堅く数珠用に珍重される。材は比較的軽軟で，気乾比重0.62，黄白色緻密でキャビネットや細工物に適するが霊樹としてあまり使用しない。

4) **ベンガルボダイジュ** ***Ficus bengalensis*** **L.** Nyagródha, Vata,（パ）Ajapāla-Nigrodha, 尼拘律（類）樹

通称 Banyan tree と呼び，前述の Vinaya-Pitaka によれば，釈迦がインドボダイジュの下で悟りをひらいた後第2週目と第5週目に，またラリタヴィスタラ（Lalitavistara：渡辺照宏訳　仏教上，岩波文庫）によると第6週目に，それぞれこの木の下で1週間坐禅冥想した由緒の木で，高さ20～30mに達する常緑の喬木である。葉は卵形，直径 1～2cm の球形の実が沢山なるが普通食用にはならない。樹幹完満，枝葉繁茂してよい緑蔭樹となり，インドでは豊穣と長寿と神聖のシンボルとされている。枝から多数の気根を出し

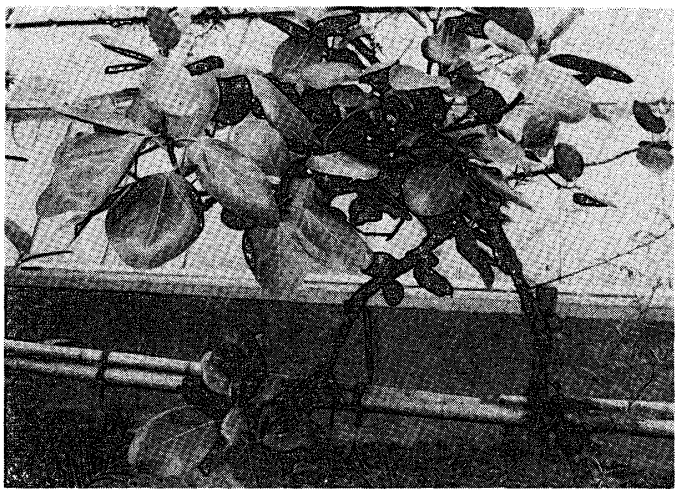

写真9 *Ficus benghalensis* L. ベンガルボダイジュ
(小石川植物園)

これが地上に達すると，つぎつぎに丁度樹幹のようになるので，一本の木があたかも林のようになる。写真11はカルカッタ植物園にある世界最大といわれるベンガルボダイジュの気根の部分で，樹令約200年以上，樹高約27m，主幹の胸高直径約5m，気根の数1044本（1965年現在），樹冠直径約130m，周囲500mで，樹下に数千人の人が遊ぶことができるといわれる。京都大学農学部の北側にあるグランドが500mトラックであるからその巨大さが想像できよう。これらの性質を仏典では次のように引用している。

仏教の理想を人間の相の中に表現しようとするためには，32相をそなえることが必要であるが，その中に真青眼相と大直身相というのがある。眼は青蓮華のように青く，身体は広大端直であたかもニグローダのごとくでなければならぬ（中阿含経—32相経第2，華厳経—入法界品，雑阿含経—婆肆吒経）。釈迦は正しくそのような相をそなえていた。

「悟りはあらゆるもののうち最もすぐれたものであるから丁度ニグローダのようである。あまねく一切のものを覆って匹敵するものがなく，ウドンバーラのようである」（仏説無量寿経巻下）

「貪欲，嫌悪などの煩悩は自身から生ずる。それはあたかもニグローダの新しい若木が枝から生ずるようなものである」(Sutta-nipāta：中村元訳　ブッダの言葉，岩波文庫)

写真10 同　前
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden.)

写真11　同　前
(Calcutta, Indian Botanic Garden.)

釈迦の父王シュッドダーナの居城であるカピラ城外には立派なニグローダ樹園があり，釈迦は後年，高弟や比丘たちとともにたびたびこの樹園に滞在して宗教活動をしていたことが中阿含経，雑阿含経あるいは増壱阿含経の中の各経に記述されている。

ニグローダはまた過去六仏の第6番加葉仏の菩提樹であることはすでに説明した。善住尼拘類樹王にまつわる面白い寓話もある（中阿含経—教曇弥経第14）。

ベンガルボダイジュはインド各地に植栽されているが，ヒマラヤ山中腹とデッカン山地に自生している。材は耐久性が強く，テントの支柱や器具類に適するが，霊樹として普通使用しない。

5）**アショカ** ***Saraca indica*** **L.** Aśoka，阿輸迦樹，無憂樹

仏教3霊樹の1つで，釈迦の生誕と結婚に関係の深い目出度い木であるが，サーラやインドボダイジュほど日本人にはしられていない。釈迦生誕に関する伝説を前述のラリタヴィスタラや仏本行集経によると

「未来の仏陀たるべきゴータマボサツ（釈迦）がシャーキャー族の王シュッドダーナの妃マーヤの右脇腹から母胎にはいると，妃は今迄に経験したことのない観喜と心の安定を覚え，城内のルンビニー園のアショカの木の園におもむき父王を迎えてこのことを伝える。……托胎後10カ月，妃は王城内におこるさまざまな不思議な前兆によって出産の近いことを予知し，ルンビニー園におもむく。時は早春，園内の木という木には時ならぬものまで花が咲き揃い，妃があるプラクシャ（Plakśa，前出）の木（一説にはアショカの木）に近づくと自然に枝が垂れ下り，妃が右腕をのばして一本の枝をつかんだ時，ボサツは母の右脇腹から歩み出る。生れたばかりのボサツが大地を歩むと，大地が割れ大きな蓮華が咲き出る。ボサツはこの蓮華の中に立ち“私は世界の第一人者である。最高者である。これは私の最後の誕生である。私は生と死の苦をうち消そう”と第一声をはなつ」

長阿含経—初大本経第1によると，この第一声は，われわれ日本人になじみの深い「天上天下唯我独為尊」となる。

シュッドダーナはわが子にシッタールタと名付ける。

「シッタールタ太子の周囲には幼少の頃から，将来出家して仏陀となるべきさまざまの奇蹟があらわれるため，王や古老たちは太子が成年に達するとその遁世をおそれて，早く美しい妃を選ぼうとし，アショカの赤い花を篭にもつて宝石で飾り，国中の乙女を城に集め，太子の手から乙女たちに花をおくらせる。最後の花がつきた時に，同じシャーキャ王族の姫ヤショーダラがあらわれ，太子は姫にアショカの花の代りに指輪を与える」

この姫が後年シッタールタ太子の妃になる。

アショカは樹高6～7mの落葉の中喬木で，葉は写真でみるように長楕円披針形の小葉からなる偶数羽状

写真12 *Saraca indica* L. アショカ
(Singapore, Botanic Gardens.)

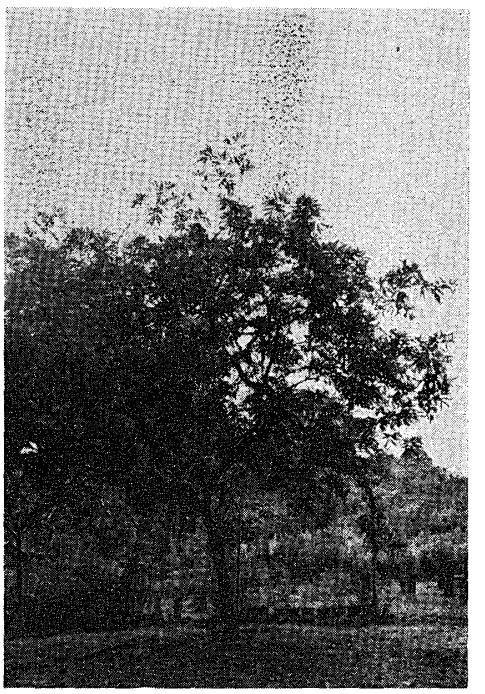

写真13 同 前

複葉で，新葉は淡紫紅色を呈して下垂する。春に橙黄から緋紅色の花が円錐花序につき，その美しさは他に比べるものがないといわれている。とくに夜間に芳香をはなつ。中部ヒマラヤから東部ヒマラヤの山麓に多く，セイロン，マレイに分布している。

6) **プラクシャ（ビンドラ）** ***Ficus infectoria*** **Roxb.** Plaksha, Bhindura, 毘陀羅樹

釈迦生誕樹は普通アショカの木になっているが，ラリタヴィスタラによるとアショカは入胎樹，プラクシャが生誕樹となる。この木はよくインドボダイシュと間違えられるが，大方広仏華厳経不思議分境界分によると

写真14 *Ficus infectoria* Roxb. プラクシャ
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden.)

「釈迦はインドボダイジュの下で悟りをひらいたが，その木はきわめて荘厳で，マンダーラヴァ，ビンドラをのぞいては比肩しうるものがない」

と記述して区別している。落葉樹で葉は写真14でみるように卵形披針状，樹形もインドボダイジュよりひと回り低い。ベンガル，アッサム州に多く，若葉を食用にすることもある。材はとくに利用されない。

7）**ジャンボラン** ***Eugenia Jambolana*** **Lam.** Jambu，閻浮樹

ラリタヴィスタラや中阿含経—味曽有経，雑阿含経—阿育王因縁経などによると，シッタールタは幼少の頃から将来仏陀となるべき相をそなえていたが，ある日ただ1人城内のジャンブーの木の下に静坐して冥想にふける。太陽が傾くにつれ，他の木の蔭は動いてゆくが，このジャンブー樹の蔭だけは動かずにいつまでも太子の上を覆っているのがみられたという。これと同じ内容の話は，太子が仏陀となった後年ジャンブーをターラやサーラにかえて伝えられている（中阿含経—味曽有経）。ジャンブーにはこのような神話的，寓話的物語りが非常に多いが，それはともかく，釈迦はその生涯においていろいろの木の下で冥想にふけるが，おそらくこのジャンブーが最初の冥想樹であろう。

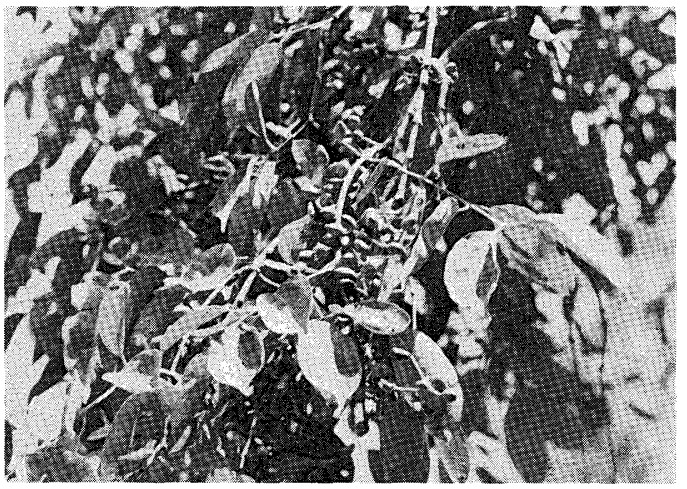

写真15 *Eugenia Jambolana* Lam. ジャンボラン
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden.)

ジャンボランはインド各地に広く分布している常緑的落葉樹で，樹高6～10mの潅木性喬木である。葉は広い卵形で，果実は漿果で生食でき，酒や酢の原料にもなるので，果実を目的として村落や家の周囲にも植栽されている。仏典ではこの実を「不死の実」「黄金の実」とも呼び，総論でものべたようにすべての果実のうちの最上のものとしている。

材をジャマン（jaman）と呼び，赤灰色を呈し，濃い斑点をもつものもある。気乾比重0.77位で耐久性もかなりよい。強度的性質はチークに似ているがやや硬く，一般建築構造材や枕木として使用される。また合板用にも使われるがやや重いのが難点である。選材すると非常によい木理がえられるので家具，キャビネット用に喜ばれ，将来家具用材としてのびる可能性があるといわれている。カンボヂヤではプリン（pring）とよばれる材の中に含まれていて，建築，構造，枕木用材あるいは農器具，杭，造作用として広く使用されているようである。

8）**オーギヤシ** ***Borassus flabellifer*** **L.** Tāla，多羅樹

一般にパルミラヤシ（palmyra palm）と呼ばれるが，ビルマではタン（tan）またはトディ（toddy）とよび，インド，セイロン，ビルマからマライにかけて，ココヤシ *Cocos nucifera* L. に次ぐ重要なヤシとして植栽されているが，一部野生化した所もある。高さ10～30m，直径 60～90 cm にも達する。葉は掌状で，屋根を葺き，繊維でむしろ，箒などを作る。古代にはこの葉を乾燥して紙のようにしたものを貝（バイ）（多（タ）

羅）葉とよび，インドでは主に経文を刻んだ。日本における仏教の研究はおもに漢訳本によっていたが，サンスクリット語の古貝葉が法隆寺や大阪府高貴寺などに保存され，法隆寺のものは推古天皇16年（608年）小野妹子が中国から持帰ったものと伝えられている。花梗から出る液を toddy と呼び甘く，煮つめて砂糖代用としたり，酒を作る。上記の樹木名はこれからきたものであろう。幼果はジェリー状で風味がある。樹幹は内側は柔かいが外側は褐色で堅く強く耐水性にとむ。気乾比重0.8位で，柱，たる木，カヌーなどに，また中空にして水管にも使用するなど非常に利用価値が高いので，インドの農家では家の周囲に植え，1つの風物となっている。これとパンノキ *Artocarpus* spp. を数十本植えておけば，デカンショ節ではないが半年は楽に寝てくらせるという。

さてターラが最初に釈迦に関連して仏教史上にあらわれるのはその婚約の時であろう。アショカの項でのべたようにシッタールタ太子はヤショーダラ姫を妃にきめたが，婚約をするためには当時の習慣にしたがって，ライバルと武技を競って勝ちぬかねばならぬ。彼はこの競技で従兄弟のデイバダッタと最後の決戦を行ない，鉄製の的もろとも7本のターラの幹を1本の矢で打ちぬき，美事ヤショーダラ姫をかちとる（Beckh, Buddhismus：渡辺照宏訳　仏教上，岩波文庫，方広大荘厳経—現芸品第13）。

仏典ではターラの木はまた宝多羅樹（七宝でできたターラ）の行樹（並木）あるいは七重行樹（七重の並木）として，蓮華，マンダーラヴァ，タマーラなどとともに阿弥陀如来の仏国土である極楽世界や毘盧遮那仏の仏国土たる蓮華蔵荘厳世界をはじめ多くの仏国土を象徴する荘厳樹として扱われる（阿弥陀経，大無量寿経，華厳経—法蔵世界品第5，入法界品など）。

写真16　*Borassus flabellifer* L. オーギヤシ
（Bangkok，佐竹氏写）

写真17　同　前
（Ceylon, Peradeniya, Royal Botanic Gardens. 佐竹氏写）

インドでは古くから，霊場の参道などの両側にオーギヤシの並木を作る習慣がある（写真17）。また法華経—入法界品第39にはターラの万能性を比喩にした次のような説話がある。

「菩薩の菩提心はターラのようなものである。その根茎枝葉華果を一切の衆生は常にとって愛用し，しばらくもやむことなし。菩提心もまたかくのごとし。はじめ悲願の心を発揮してより成仏（悟りをひらくこ

と）に到るまで正法（仏法）は世に住し，常時一切の世界を利益して間歇することなし」

オーギヤシはごくまれに枝を出すこともあるが，普通樹冠部をきれば枯死する。仏典でもしばしばその根本を断絶することを「ターラーの頭をきる」ごとしと表現している。たとえば，雑阿含経—大空法経に次のような釈迦の言葉がある。

「老死即ち断ぜば則ちその根本を断ずるを知らん。多羅樹の頭をきるがごとし。未来世において不生法を成ぜん。行即ち断ぜば……」

これは仏教の真理である因果関係を教えたもので，苦悩の原因を除去すればおのずから苦悩から解放され涅槃をうるという意味である。またテーリーガータ（Therī-Gātā：早島鏡正訳　長老尼の詩，仏典Ⅰ）に，王女スメーダが仏教に帰依し，父王に出家を願う対話の中にも次のような言葉がある。

「はかない栄華はなんの役にも立ちません。私はもうもろもろの欲望を離れすてて，丁度ターラの木の切株のようになっています」

9）**マンゴー** ***Mangifera indica*** **L.** Āmra,（パ）Amba 菴羅樹

南国の名果マンゴーの果樹，樹高20～30m，直径0.8～1.0mに達する常緑の大木で，葉は長楕円形で，黄色または帯緑色の小さな花が頂生の大円錐花序に沢山つき，芳香があるが，不完全花が多くその割に結実が少ない。それでも随分沢山の果実がなる（写真19）。原産地はインドまたはビルマといわれ，両国ともにマンゴーについてはいろいろの伝説があり，仏前によくこの果実を供える。ヒマラや山麓からビルマにかけて多く，広く東南アジア地区に果実を目的として栽培されている。

マンゴーは仏教に非常に縁の深い学林樹木で，釈迦はその遊行中しばしば各地のマンゴー林に滞在している（雑阿含経，長阿含経）。

その中でもパーバー村の鍛冶屋の子チュンダのマンゴー林，ベーサリ村の遊女アンバパーラの寄進したマンゴー林が有名である（長阿含経—散陀難経第4，増壱阿含経—勧請品第19，雑阿含経—菴羅女経）。

釈迦はチュンダのマンゴー林に滞在中，彼がとくに釈迦のために作った食事（一般には野猪の肉といわれるが一説には栴檀樹茸“白檀の木にできた茸”ともいう—長阿含経，遊行経第2）のために赤痢状のはげし

写真18　*Mangifera indica L.* マンゴー
（小石川植物園）

写真19　同　前
（W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden.）

い腹痛になやまされ，その死を早めたと伝えられている。アンバパーラはパーリー語でマンゴーの果実という意味で，彼女はベーサリ城のマンゴー林にすてられていた（一説には奈樹の瘤から生れたともいう—長阿含経，遊行経第2）のを管理人が拾い育ててこの名をつけたといわれている。美貌で後に高級遊女になったが，後年釈迦に帰依しマンゴー林の寄進を申出た。当時インドには強い階級制度がしかれ，このような職業の女性からの寄進を釈迦がうけいれるかどうか注目されたが，人間は平等であり区別はないとする釈迦は快くこれをうけアンバパーラ女が歓喜したと伝えられる。

教義の比喩としてもマンゴーはよく引用される。

「無常想（諸行無常ということ）を修得すれば，一切の執着，憂，無智などを断つことができる。これは，丁度マンゴーの枝を暴風がゆり動かせば，その果実がことごとく落ちるようなものである」（雑阿含経—樹経）

「マンゴーの木の花は多いが実を結ぶものは少ない。これと同様に衆生の中に菩提心を起すものは多いが，これを成就するものは少ない」（ジャータカ：前出）

なお，漢訳阿含経ではしばしばマンゴー林に榛林という訳語が出てくる。榛は中国で**カリン *Cydonia Sinensis* Thouin.** を意味し，菴羅樹，菴摩勒という字もあてているが，中国原産でむしろ寒地に適しインドには生育しない。マンゴーより樹形が低く，葉もマンゴーの長楕円形披針状に対して卵形であるが果実の形，大きさが似ているために混同されたのかもしれない。カリンの果実は非常によい香りをもつが生食できない。パーリー原語からみても榛林はマンゴー林を意味し，長阿含経—初大本経第1ではアンバパーラー女を奈女と訳し「奈樹の瘤節より生る」としていることからも上の推定に間違いはないと考えられる。

写真20 *Cydonia Sinensis* Thouin. カリン（箕面・勝尾寺）

マンゴーはインドで am, amba ともよび，材は褐色，気乾比重0.6～0.7で耐水性強く，強度もほぼチークなみであるが，変色しやすく製材後すぐ乾燥する必要がある。シッソー *Dalbergia Sissoo* Roxb. やインドチャンチン *Cedrela Toona* Roxb. とともに用途の広い材で床板，天井板その他一般建築，一般家具材および箱（とくに茶箱）の材料として利用が多い。合板にも使える。ビルマでは thayet，タイでは mamuang-pa とよんでいるがこの木の栽培は材よりもむしろ果実にある。台湾の台中から彰化に通ずる沿道数kmにわたって林務局管理の美事なマンゴーの並木があり，果実は国庫収入にあてられているそうだが，日本の1級国道なみの車のラッシュにあの美事さがいつまで続きうるかひとごとならず気がかりである。

10） **ビャクダン *Santalm album* L.** Candana，檀香（樹）

実生でよく発芽し1年位は自生するが，その後は根に多くの寄生根を出して，他の木の根に寄生しないと育たないという珍らしい半寄生木で，その育成には特殊の技術を要する。葉は卵形披針状，樹高約10mに達する常緑の中喬木である。材は一般に交錯木理が多く，辺材は白色，心材は産地によって淡黄色から紫褐色を呈し，外気にさらされると暗色をおびる。原産はインド南部であるが，広く東南アジア，ポリネシア群島に分布している。辺材には香気はないが心材中にサンタロールを主成分とする精油を含んでいて芳香を発し，とくに精油分が多く香気の強い部分は香木として愛用され，これを栴檀といい，色調によって白栴檀，黄栴

檀，紫（赤）栴檀ともよんでいるが，漢訳仏典では樹木も香木もともに栴檀と訳している。気乾比重約0.9で硬くて重く，仏像，彫刻，宝石箱，装飾家具，楽器，変った所では高級棺材としてかつて中国へ相当量輸出されていたが，現在はどうであろうか。日本では白檀の扇子が最近目につく。また心材を粉末にして薫香にするが，インドではこれを練って塗香として愛用する。心材とくに根株から水蒸気抽出した精油を白檀油とよび，ペニシリンが発見されるまでは有名な性病の薬であった。

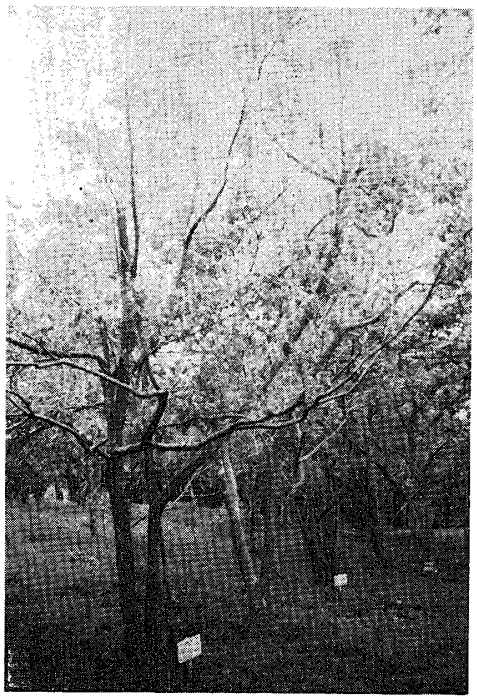

写真21　*Santalum album* L. ビャクダン
（台湾・墾丁・熱帯植物園）

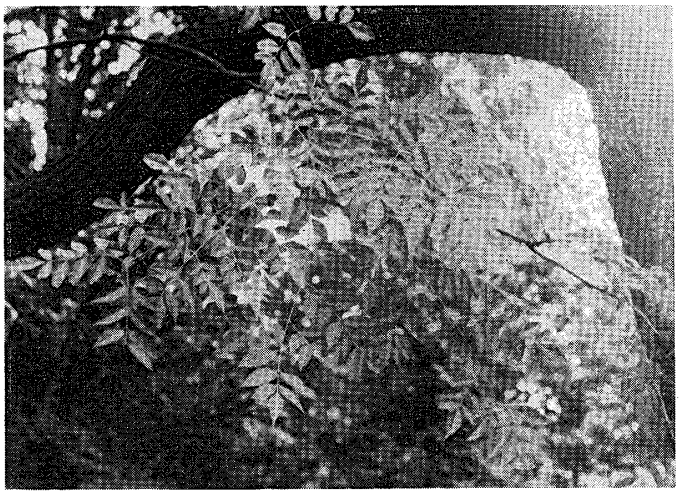

写真22　*Melia Azedarach* L. var *japonica* Makino.
センダン　（京都植物園）

漢語の栴檀，英語の sandal (wood) はいずれも梵語の candana から転じたといわれ，インドでも通常 sandal wood と呼んでいる。日本でいうセンダン科，属の**センダン *Melia Azedarach* L. var. *japonica* Makino** には中国語の楝という字があてられ，全く別の樹種である。日本のセンダンには花，材ともに芳香はないが，これに最も近いタイワンセンダン *Melia Azedarach* L. の花にはヘリオトロープに似た芳香があり，同属のインドセンダン *M. Azadirachta* L. も花に芳香をもち，種子から香油がとれ，材を焼くか，摩擦すると芳香を発して涼気をさそうといわれている。

「栴檀は双葉より香し」の栴檀はもちろん白檀のことで，観仏三昧海経巻第1の

「センダンがイラン草中に生じ，まだ双葉にもならぬうちは発香せず，唯イランの臭気のみあるが“栴檀の根芽漸々生長し，わずかに木とならんと欲し香気まさに盛なり”」

から出たものである。

マガタ国の王子アジャータサットが父王ビンビサーラを幽閉して死に到らしめたのは有名な話であるが，釈迦は祇園精舎で比丘たちに「後年王となり，この悪行を悔い仏教に帰依せり。これ恰もイランの毒樹より栴檀を生ぜるごとし」と無根の場所から信仰が生じたことをのべている（増壱阿含経—清信士品第6）。イランは梵語 eraṇḍa, *Ricinus communis* L. トウダイグサ科のトウゴマでいわゆるヒマシ油の木である。

日本でシタンと呼ばれる材にはよく *Dalbergia* spp. のものが混入されるが，本来のシタン *Pterocarpus santalinus* L. は材に香気があり，欧州では sandal wood，日本では紅木紫檀，古くは赤栴檀とよび，仏像，器物，彫刻に用いたことがいろいろの古典に記されており現在も三味線の棹，胴には最高級品である。

京都嵯峨清涼寺の釈迦如来立像は，寺伝では牛頭栴檀をもって作られた如来の像（増壱阿含経—優塡王経？）の模像で，インド—中国—日本のルートで将来したとされ，赤栴檀を以て作られ，“香ありて夏月汗を生ず”ともいわれている。また室生寺の弥勒菩薩，高野山金剛峯寺の枕本尊，法隆寺の九面観音菩薩はいずれも寺伝では将来仏で白檀造りとされており，京都伏見区法界寺の薬師如来立像は赤栴檀，京都高雄神護寺の薬師如来立像，七本松清和院の河崎聖観音立像は弘法大師作のいずれも檀像と伝えられており，京都大原野村勝持寺の胎内仏薬師如来小像は白檀の一木造りとされているが，これらの仏像とくに将来仏の由来，材質については諸説いりみだれているものもある。

仏典に出てくる栴檀の種類にもあいまいな所があるが大体次の3種類になる。

ウラガサーラチャンダナ	(Uragasāra candana), 蛇心檀香，海此岸栴檀
ゴーシィルシャチャンダナ	(Gośīrṣa candana), 牛頭栴檀
カーラーアヌサーリンチャンダナ	(Kālânusārin candana), 隋時檀香

ゴーシィルシャチャンダナはインド南部の山地からでる黄栴檀で，最も香気の強い高級品，赤銅色の栴檀や赤栴檀もこの部類にはいるとされている。カーラーアヌサーリンチャンダナは筆者には Kālânusārin (*Styrax Benzoin* Dryand, 安息香樹）と candana（栴檀）に分けた方が妥当ではないかと思われるが一般には1種類として扱われている。

これらの栴檀は当時のインド人たちが薫香や塗香として身につけ，暑気を払う心身清浄剤としていたことや，建築，家具，その他器物の用材として仏廟や僧房の一部に使用（法華経—序品，方便品，信解品など）されていたことは歴史的な事実であり，また如来たちや法華経を信奉する人々が口から青蓮華の香を出し，一切の毛孔から栴檀の香を出すという表現はあながち仮空のことではない。しかし一般には栴檀は如来たちの生誕，成道（悟りをひらくこと）あるいは説教を慶祝して空中からふりそそぎ，如来を供養し，仏国土に薫るという神話的な取扱いの方が多い。

栴檀を教義の解説に利用している例を1つあげると，弥勒菩薩がスダナ王子に

「黒栴檀香はもし一鉢を焼けば，その香普く小千世界（仏教で考える世界の1つの単位）に薫じ，三千世界の中に満つる珍宝の価値は皆およぶこと能はざるごとし。菩薩の菩提心の香もまたかくのごとく，功徳は普く法界に薫じおよぶものなし。白栴檀香はもし身に塗れば一切の熱悩を除き，心身清浄ならしめる。菩提心もよく一切の煩悩（貪欲，いかり，無知などその数108という）を除き智慧をえて清涼ならしむ」（華厳経—入法界品）

変った例としては一青年が美しい尼僧スバーを誘惑しようとして

「新しい布団をしき，栴檀の香木で美しく作られ，その香りのする高価な臥床に寝て下さい」

と口説く一節がある（テーリーガータ Therī-Gāthā：早島鏡正訳　長老尼の詩，仏典Ⅰ）。

中阿含経—遊行経第2によれば，釈迦は臨終の折，弟子のアーナンダに命じて

「私の遺体を火葬にする時は転輪王（7つの神通力と4つの徳を備えて世を治める神話上の帝王，神話ではよく釈迦にたとえられる）と同じように栴檀香槨（棺）におさめ，栴檀その他の香木を薪にせよ」

と遺言しているが，インドでは昔から薪の中に加えられる白檀の枝の量が死者の貧富の尺度となるといわれている。

現在でも火葬は聖なるガンジス河などの河畔で衆人環視の中で行なわれるが，上記の尺度がいまなお残っているかどうか筆者はしらない。

11）**タマーラ** ***Cinnamomum Tamala*** **Nees**? Tamāla, 多摩羅跋香樹

葉に芳香をもち，チャンダナその他の香木やマンダーラヴァなどとともに，しばしば仏典にあらわれるが，かなり問題のある樹種で，いろいろの辞書から結局次の3種があげられる。

Xanthochymus pictorius Roxb. (*Garcinia xanthochymus* Hk.)

Laurus Cassia L.

Cinnamomum nitidum Bl.

この内最後の *C. nitidum* はあまり生育していないらしく，Hooker も？をつけているので筆者にはそれ以上立入る資格はない。

漢訳仏典ではほとんどが *X. pictorius* としている。Hooker によるとこのシノニムに *Garcinia xanthochymus* Hk. があり，*G. morella* Desr. には別名 Tamala の名があるが，この両樹種はいずれも葉に芳香がなく，仏典のタマーラとは別のものと考えるのが妥当である。*Laurus Cassia* のシノニムには

Cinnamomum Tamala Nees.

Cinnamomum zeylanicum Breyn.

があり，仏典の内容から考えて，このどちらかがタマーラであるとみるのが妥当であろう。前者はインドヒマラヤ山地方原産，後者はセイロン原産であるが，非常によく似ており，セイロンニッケイの総称で，セイロンからビルマ，マライ地区にかけて栽培されている。昔から有名な香料，薬用植物で，高さ10m前後の常緑喬木，葉をもむと芳香を発し，若葉は淡紅色できれいである。ニッケイ類の樹皮の上皮をのぞいて乾かしたものを桂皮と呼び，そのまま粉末にして菓子や料理の香辛料としているが，セイロンニッケイの粉末はとくにシナモンと呼んでいる。また桂皮や根を蒸溜して桂皮油，葉から肉桂水を作り香料，健胃剤とする。

写真23 *Garcinia xanthochymus* Hk.
タマゴノキ（伊豆薬用植物培栽試験場）

写真24 *Cinnamomum zeylanicum* Breyn.
セイロンニッケイ（伊豆薬用植物栽培試験場）

総論で述べたようにタマーラの葉（tamāla-pattra）は神秘化され，センダンやマンダーラヴァの花とともに，仏国土や仏塔を荘厳し芳香で満す（大無量寿経，観無量寿経，阿弥陀経その他）。

なお，***G. xanthochymus*** はタマゴの木とよび，原産地は南インド，アッサム，ビルマ，マライからアンダマン諸島に分布し，果肉をシャーベットや薬味原料とするため栽培されている。また *G. morella* はアラダルとよび，インドのベンガル，アッサム地方からビルマ，タイに産し，樹液から黄色染料がとれる。同属に果物の女王といわれるマンゴスチンの木 *G. mangostana* L. がある。

12）**シッソー** ***Dalbergia Sissoo*** **Roxb.** Śiṇśapā 尸舎婆（尸攝恕，申恕）樹，印度黄檀

マンゴー，サーラとならぶ学林樹木で，釈迦たちはたびたびコーサラ，マラー，クルー国（いずれも釈迦在世当時のインドの16大国の1つ）の各地のシンサパー林に滞在して宗教活動を行なっている（雑阿含経—申怨林経，頻頭城経，私陀迦経，蘖紐多羅経，中阿含経—仏藍経第6，波羅牢経第10，蜱肆経第7，求法経第2など，長阿含経—遊行経第2）。

釈迦はある時ラージャグリハ（王舎城）郊外のシンサパー林におもむき，数枚のシンサパーの葉を手にとって比丘たちにいう。

「私の手にしている葉は林内のシンサパーの葉の数に比較すると非常に少ない。これと同じように私が覚知していることは非常に多いが，話すことは非常に少ないから，各自それぞれ増上欲を起して（努力して）無問覚（自ら悟ること）を学びなさい」

これも総論で述べたように，釈迦が比丘たちにそれぞれの能力，環境，精進に応じて悟りを得させようとする考え方を示したものといえよう（雑阿含経—申怨林経）。

写真25　*Dalbergia Sissoo* Roxb. シッソー
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden.)

シッソーは高さ25～30m，直径 70～80 cm に達する落葉樹で，葉は3～5葉の複葉である。仏典のごとくインド各地にあるが，とくにパンジャブ，ウッタル地区に多い。通常 sisso または shisham と呼び *Dalbergia latifolia* Roxb. (rose wood) と共にインドの重要樹種である。材は黄褐色から暗褐色を呈し，気乾比重 0.8 前後，木理がきれいで *D. latifolia* とともに高級家具とくに椅子，キャビネットおよび車輪，運動具などに用いられる。

13）**ヒマラヤシダー　*Cedrus Deodara* Loud.** Devadāru, 雪松（木槨，天木香樹）

法華経方便品第2に

或有起石廟　栴檀及沈水　木槨幷餘材　甎瓦泥土等

（或は石廟—仏廟—を起て，栴檀及び沈水，木槨並びに餘の材，甎瓦泥土等でなす）

この木槨の原語は Devadāru すなわち *C. Deodara* Loud. でいままでの仏教樹木中唯一の針葉樹である。漢訳仏典では木槨または天木香樹としたものが多く，訳註に「形白檀に似て微かに香気があるといわれる」とされている。天木香樹は一般に *Juniperus rigida* S. et Z. で別名和白檀ともいい，*J. chinensis* L. にも白檀という別名がある。*C. Deodara* と *J. rigida* は葉の形やつきかたも比較的よく似ており，いずれも共通的な樹脂の香りがあることや昔から「シダー」と「ジュニパー」が混同されていたことなどを考えると，天木香樹という漢訳語や註のような混乱がおこる可能性は十分考えられる。しかし漢訳語木槨の根拠がどこにあるのかわからない。漢字木密は *Zizyphus*，槨は *Illicium religiosum* S. et Z. にあてられている。

さてヒマラヤシダーはインドで deodar と呼び，総論で述べたようにサーラ，チークと共に3大重要樹種である。標高2000～2500mに生じとくにヒマラヤ山脈周辺に多く，原産地では樹高50m，直径3mの巨木となる。日本には庭園樹としてなじみの深い木であるが材は案外利用されていない。材は淡黄白色で，気乾比重0.56，心材に揮発性のデオダール油を含み独特の香気がある。耐久性が強くインドでは枕木に最も多く利用されているが，その他建築，橋梁の構造部材，床板，屋根板など一般建築，箱類などにも使用される。節から樹脂がいつまでもしみ出るので家具にはあまり使用されない。

Deodar や rose wood (*Dalbergia latifolia*) で作った木棺が Harappa 遺跡（前3000年～前2000年頃西パキスタンからインドにかけてのインダス河流域に栄えた都市）から発見されており，その耐久性のよさを物語っている。

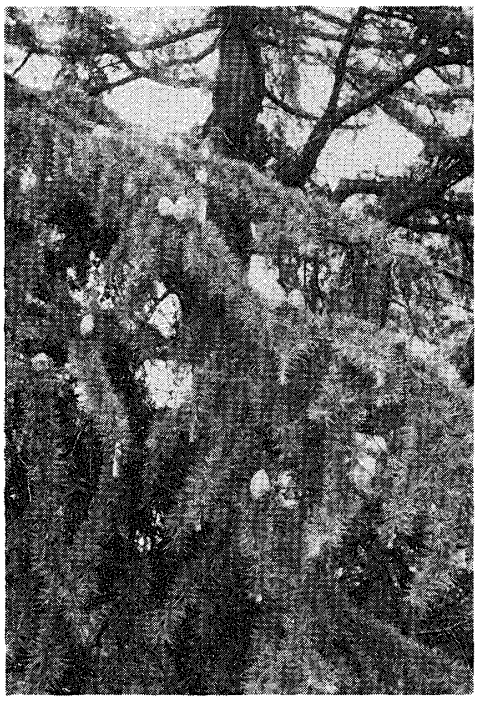

写真26 *Cedrus Deodar* Loud.
ヒマラヤシダー （京都植物園）

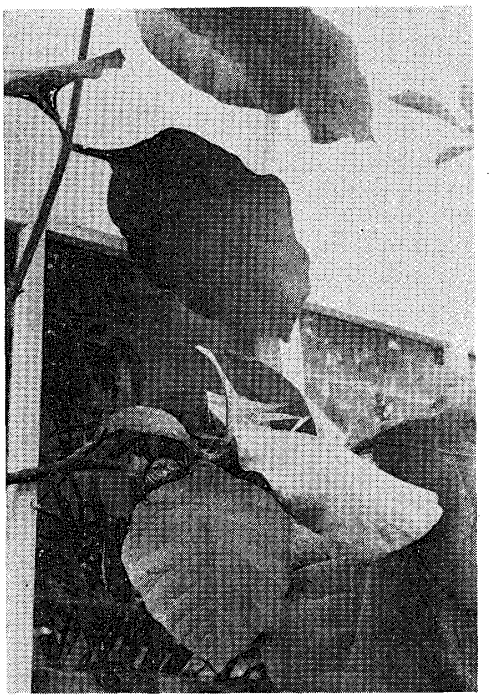

写真27 *Tectona grandis* L. f. チーク
（伊豆薬用植物栽培試験場）

14) **チ ー ク *Tectona grandis* L. f.** Sāka, 直樹，柚木

仏典にはそうたびたびは出てこないが，長阿含経阿摩尽経第1での釈迦の話によると，昔，声摩という大王に4人の王子がいたが，ざん言によって国を迫われ，ヒマラヤ山南部の直樹林 Sāka sanda に住み子孫をふやした。これが釈迦族の先祖であるという。したがって直樹林は釈迦族発生の地で，その意味で仏教史的に重要な樹種であるが，たびたび述べたように材の性質，蓄積など，木材利用学的にもインドの重要樹種である。

樹高25～45m，直径1～2mに達する大木で，葉は卵形，楕円形で写真27でみるように非常に大きい。インド，ビルマ，タイ，マレイ，ジャワからセレベス島に分布する。生長に遅速があり，台湾では10年で胸高直径 30cm に達したという記録がある。環孔材の特長として生長，比重の適度のものが強度的に最も材質がすぐれ，チークの場合年輪密度 2～5 1/cm がよいとされている。材質や用途については説明するまでもないと思われるが，気乾比重0.6～0.7，辺材は灰白色であるが心材は黄褐色で耐久性がよく，虫害にも強いので産地では鉄道の客車，貨車，船舶および家具用重要樹種である。

わが国にも高級家具，キャビネット用に輸入されているが，色調，材質はビルマ産が最もよく，タイ国，

インドネシヤ産がこれに次ぐといわれている。インド産はやや色調がこいが，木理がきれいだともいう。Sissoo と共に吸脱湿速度の遅い材で，この点も家具材としてすぐれている。

インドでは teak，ビルマでは kyun と呼びその蓄積は世界一といわれる。タイ国でも *Shorea* につぐ主要樹種である。

15) **シーター** ***Melia Azadirachta*** **L.**? Śīta，尸陀樹

テーラガータ (Thera-Gāthā：早島鏡正訳　長老の詩，仏典Ⅰ) に

「ひとりでシーター林にはいり，満足し，心の安定に住した修行者は，身毛のさかだつことのない勝利者であり，身体に関する心の専注を守りつづける堅固者である」

「美しい花のさくシーター林の冷やかな洞窟のなかで，わたしは手足に水をそそいでひとり経行しよう」

という詩がある。舎衛城郊外にシーター林 (śītavana，尸陀林) があり，鬱葱として暗く (andha)，夏なお寒さを覚える (śīta) くらいであったので，一名暗林，寒林ともいい，釈迦はよくこの林の中の丘に住んでいたという。

また増壱阿含経—安般品第17では Andhavana (安陀林，暗林) は舎衛城郊外の比丘尼専用の園林で，比丘専用の祇園精舎に相対するものであったらしいと訳註しており，雑阿含経では安陀林は祇園精舎内にあって，釈迦はよくここで冥想にふけったとのべている。こういったことから尸陀林と安陀林は同一ではないかという説があり，またシーターは園の所有者の名ではないかという人名説もでている。

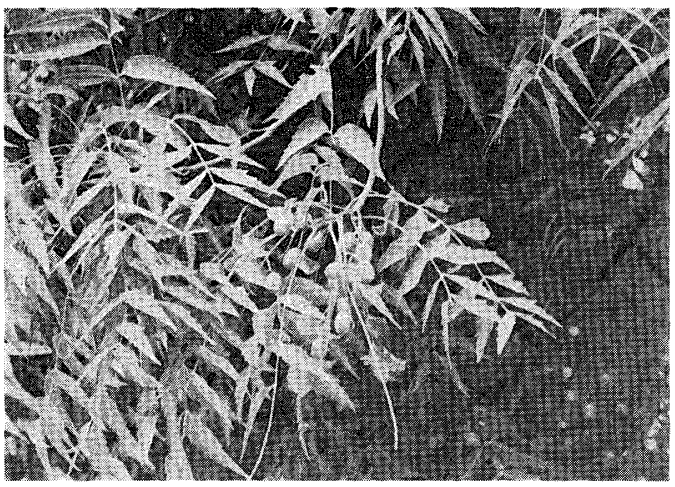

写真28　*Melia Azadirachta* L.　インドセンダン
(Delhi, Buddha Jayanti Memorial Park.)

梵語 śīta 自体いろいろの意味をもっているが，上のテーラガーターの詩からむしろこれを樹木名と考えるのが妥当であるかもしれぬ。その場合，次の3樹種がでてくる。

Calamus Rotang L.

Cordia Myxa L.

Melia Azadirachta L.

C. Rotang はトウ属，ロタントウであるからまず該当しないとすれば，あとの2樹種のいずれかになる訳であるが，上のいろいろの事例から筆者は最後の *M. Azadirachta* ではないかと思う。

M. Azadirachta は常緑の樹高12～15mに達する通直な高木で，葉はセンダンに似ているが写真のように鋸歯が鋭く，輪生である。白色小形の花が腋生円錐花序について，蜜のような香気をはなつ。インド原産でヒマラヤ地区に多いが全国に分布し，ビルマ，インドネシヤ，フィリピンに及んでいる。インドでは神聖樹とされ，街路街，緑蔭樹としても有名である。*M. Azedarach* L. とともに種子はビーズとして装飾用とな

るが，種子油をインドでは neem，セイロンでは margosa，ジャワでは minba と呼び薬用にする。材は焼くか，摩擦すると芳香を発して涼気をさそうといわれている。マホガニーに似て，辺材は灰色，心材は赤褐色で硬く，かなり耐久性があり，家具，キャビネット用に利用する。

C. Myxa は常緑ではあるが潅木性の小喬木である。葉は大体楕円形，核果は約 2 cm の卵形で，果肉は食用，薬用になる。エヂプトからインド，セイロン，ビルマ，マライに分布する。またこの葉は *Grewia microcos* L. の葉と共に，葉巻タバコの覆葉として愛用され，そのために栽培することもあるという。材は灰色で気乾比重約0.53，厚板，家具，箱などに利用する。（未完）

参考文献

国訳一切経，大東出版社.

中村　元編，仏典Ⅰ，Ⅱ（世界古典文学全集）築摩書房（昭和41～2年）.

望月信亨，仏教大辞典　世界聖典刊行協会（昭和32年）.

坂本幸男，岩本祐訳註　法華経上中下（岩波文庫）岩波書店.

中村　元，早島鏡正，紀野一義訳註　浄土三部経上下（岩波文庫）岩波書店.

渡辺照宏訳，仏教上（Hermann Beckh, Buddhismus）（岩波文庫）岩波書店.

中村　元訳，ブッダの言葉（Sutta Nipāta）（岩波文庫）岩波書店.

渡辺照宏，お経の話（岩波新書）岩波書店（昭和45年）.

渡辺照宏，日本の仏教（岩波新書）岩波書店（昭和45年）.

M. Monier-Williams, Sanskrit-English Dictionary, Oxford (1970).

T. W. R. Davids, W. Stede., Pali-English Dictionary, Luzac & Co. (1966).

H. Oldenberg, The Vinaya-Pitaka Vol. 1, 2, 1929～30.

上原敬二，樹木大図説１～３，有明書房（昭和34年）.

会田貞助，南洋材の知識　前後　特殊木材研究所（昭和40年）.

三浦伊八郎，熱帯林業　河出書房（昭和19年）.

井上頼成他，最新園芸大辞典１～６　誠文堂新光社（昭和44年～）.

E. J. H. Corner，渡辺清彦，図説熱帯植物集成　広川書店（昭和44年）.

滕詠延，台湾重要森林植物名彙　台湾省林業試験所（1947）.

J. D. Hooker, Flora of British India Vol. 1～7 Reeve & Co. (1876～1897).

K. A. Chowdhury, Ghoch, S. S., Indian Wood Vol. 1 Manager of Publications (1958).

H. Troter, The Common Commercial Timber of India Government of India Publications (1929).

C. C. Plowden, A Manual of Plant Names, 2 nd Ed., George Allen & Unwin (1970).